

僕と猫とダンボールと 第二話

とある秋の夜。車で友人宅からの帰り道。助手席に固定したダンボール箱の中には、さつき拾った、怪我をして動けない猫が入っている。

人生はいつ何が起こるかわからない、とはよく言ったもんだ。何かの瞬間から、いきなり人生がガラガラ！と動き出したりする。まあ、今回はそこまで大げさじゃないにしても、やつぱりちよつとは大ごとだった。

いずれにしても、問題は多い。

僕の家は両親と姉、祖母の五人家族。家族全員が動物好きなので、そこはいい。ただ、犬がいる。犬の名前はミーコ。小さなマルチーズだ。実は我が家の犬ではなく、隣のご夫婦が日中仕事の間、祖母が預かっている。いわば我が家はミーコの保育園だ。ご夫婦は毎朝、ミーコを預けにきて、夕方、迎えに来る。ただこのミーコ、気性がかなり荒い……。窓の外をノラ猫でも通り過ぎようものなら、えらい剣幕で『ギャンギャンギャン！』と吠えまくる。間違っても、猫と一緒にいられる訳がない。



家に着いた。家族はすでに寝静まっていた。こんな風景はいつものことだけど、今日は特別すぎるダンボール箱の荷物付き。いつも夜中は静かに歩くようにしているけど、その日はいつもより更に足音を立てないようにして、二階にある自分の部屋に行った。静かにダンボール箱を床に置いて、とりあえず中の猫を確認した。覗き込む僕をゆっくり見上げて、またあのか細い声で『にゃあ、』とひと鳴きした。あまりにも力のない小さな声だった。『こんな小さな声じゃ、家族の誰にも聞こえないか・・・』そう猫に話しかけて、そっと蓋を閉じた。これからどうしよう、どうやって面倒見よう、僕が仕事の間はどうしよう、そもそも、元気になるんだろうか？ 明日の朝には、死んじゃうんじゃないだろうか？ 心が落ち着いてくるにつれ、少しづつ事の重大さがわかってきた。あれこれと考えているうちに、その夜はそのまま眠ってしまった。

次の日の朝、目を覚ますやいなや、さっとダンボール箱の蓋を開けてみた。猫は例によって細い声で『にゃあ』とひと鳴きした。

(良かった・・・生きてる)

僕は少しほっとして、リビングに行った。家族はいつも通りに起きて、いつも通りの朝をそれぞれ過ごしていたが、何故かいつもと少し違って見えた。僕に“やましい”ことがあるから、そう見えたのだろう。ミーコはまだ来ていなかった。今考えると、この時、家族にも言ってしまうえば良かったのだけど、その時は何故か言い出すことができなかった。

運よく、僕はこの日は仕事が休みだった。とりあえず、これからの事を考えて、行動する時間が作れる。

そうこうしているうちに、ミーコが来た。ミーコは、うちの家族全員になつてはいる。朝、うちにやってくると、まずは一通り家族全員に“挨拶”に来る。僕のところに来たミーコは、いつもより時間をかけて僕のおいをクンクンとかぎ、少し訝しげな顔をして行ってしまった。

(さ、、、さすがは犬・・・もう気づいてやがる・・・)

感心している場合ではない、こいつが、一番の問題なのだ。



さて、今日やることは決まっている。まずは病院だ。

我が家でも、以前犬を飼っていた時があって、その時お世話になっていた獣医さんに連れて行った。

診察を終えて、いくつかわかったことがある。猫はメスであること、おそらく二〜三才くらいの若い猫だろうということ、それとおそらく、人に飼われていたかもしれないということ。そして、後ろ足が骨折しているということ。

『なるほど、骨折かあ』先生にそう言うと、『うん、でも、すぐによくならよ、安心しな。あ、今日の診察代は5千円でいいや。ノラなんだろう？ しょうがないや』と返してくれた。

(5千円でいいや、かあ・・・でもまあ、相場だよね・・・。これから、いくらかかるんだろう・・・?)

僕に新たな心配ができてしまった。

『まあいいか！ おい、すぐによくなれるってさ。良かったな！』ダンボール箱の中で足を投げ出して横たわっている“彼女”に声をかけると、彼女はいつもより少し力のある声で『にゃあ』と鳴いた。確かに彼女は、声をかけると返事らしき鳴き声を出す。人に飼われていたかもっていうのも、なんとなくなづけた。

これからの事についてその日に決めたことは、ひとまず元気になるまで僕の部屋で飼うということ。どうせ骨折して動けないから、このダンボール箱に入れて部屋に置いておくだけ。季節的にも、暑くも寒くもないから大丈夫だろう。それから、元気になった頃、飼い主（がいるなら）を探してみよう、ということ。家族には、ばれた時の説明で、いいや。まさか、僕がいない間に見つけたからと言って、捨ててしまったりはしないだろうから。

そう決めた僕は、ダンボール箱の中の彼女にまた声をかけた。

『とりあえず、しばらくは俺の部屋だけいいよな。お前は動けないし、飼い主見つかるまでの付き合いだから、お前の家はこのダンボール箱でいいよな。』彼女は、いつもの『にゃあ』を返してくれた。まるで、状況がわかっているかのようにだった。

それにしてもこのダンボール箱、たまたまその場にあっただけで、動けない彼女の家の役割と、彼女の通院時に運ぶ役割として使うには、本当に使い勝手がよかった。それに、お野菜が入っていただけあって、結構丈夫な素材でできている。箱も、黙ってその役割を請け負ってくれていた。ただその時はまだ、このダンボール箱がその後の彼女の一生を見届ける箱（いや、厳密にはその後）になることは、僕も彼女も想像していなかった。

つづく

